

学力テストだけじゃない

秋田の教育がいま、全国的に注目されている。その第一の要因は、昨年、一昨年と小中学校の全国学力テストで秋田がトップに立ったことであつた。当初は半信半疑であつた人びとも、2年連続トップになったことで、「なぜ秋田が」と真面目に問うようになつた。東京の山手線には「秋田に学べ」という進学塾の広告が出たほどである。

第2は、寺田典城県知事がこの全国学力テストの市町村別成績を公表し、一石を投じたからである。学力テストの市町村別結果については、文部科学省が公表しない方針を打ち出し、自治体の各レベルの教育委員会もそれに従っている。寺田知事の決断は、そのような国家統制への地方からの挑戦にほかならない。県内では藤里町など一部町村が反発して学力テストへの不参加をいったんは表明するなど、さらに論議を呼んだ。

センター試験の点数などでも再上昇し、この秋田の地に日本はもろろん海外からも優秀な学生が詰めかけていることである。ある大手予備校が最近発表した入試難易度予想データによれば、本学のC日程(センター試験の成績と英語小論文)で合格ボーダーラインに達するにはセンター試験の93%の得点が必要となつている。これは実に、東京大学(理Ⅲを除く)の92%を上回つていた。

ここまで書いて、秋田の子どもたちは体力テストでも全国トップクラスと報じられた。「教育の秋田」にはいま、大きな注目が集まる。

「田舎」の方が成績優秀

まず第1の全国学力テストでの連続トップの好成績については、県内でもさまざまな検証がなされている。

好結果を生んだ要因の一つとして、家庭がしっかりしていることが挙げられた。朝食、夕食を両親や家族とともに規則正しくとる。それは学童・生徒の精神や情緒の安定につながっていると指摘され

た。家庭の在り方がいかに重要かがわかるであろう。

秋田の子どもたちは塾に通う率がきわめて低い。しかしその分、家庭で予習・復習する。テレビを見る時間も少ない。さらに秋田市の有名な「竿灯まつり」にも見られるように、子どもたちが地域社会で役割を演じていて、田舎に行けば行くほど鎮守の祭り

教育の秋田、その底力の秘密



国際教養大学 理事長・学長 中嶋 嶺雄

にも多く加わっている。つまり今日の日本社会が失いつつある古き良き伝統が生きて、保守されているのだ。

そこで第2点、市町村別の学力テストの成績を知事が公表するに至った所以に移ろう。同じ秋田県内でももちろんテスト成績にはばらつきがある。だが、ハタハタ漁の八峰町や秋田杉の里の上小阿仁

正論

村、西馬音内の盆踊りの羽後町といった人口の少ない田舎の方が、秋田市など都市部よりも成績が良いという、大いに考えるべき結果が含まれていたのである。

ここには、日本社会の現状を見る上での重要な課題が潜んでいるように思う。

そもそも、学力テストの詳しい結果を公表すべきでないという文科省方針は根本的に誤っている、と私は思う。それが序列化につながるとか、競争をおおるといった理由づけもおかしい。これでは「ゆとり教育」から脱却するといふ最近の方針転換がどこまで本気なのかと疑いたくなる。

大学教育にも知事の支援

教育においては、能力や成績に応じた対応がぜひとも必要なのである。運動会で等級を避けたり、成績表の相対評価を避ける「平等主義」の悪弊からは、速やかに脱しなればならない。他の都道府県教委も日教組も結果公表には文科省と同一歩調をとっている。そのような「一貫性教育ギルド社会」から脱しない限り、わが国の教育再生はできないのではないかと。

第3の国際教養大学に関しては、私が責任を負う公立大学法人であり、詳細な言及は避けたい。しかし本学の開設自体が秋田県議会での、つまり寺田県政の重大課題なのであつた。それだけに私たちは、これまでの日本の大学にはない個性を求めた。

すべての授業、学内の会議を英語で行う。全学生が1年間の海外留学で1学年分の単位を取得し、単位の互換を可能とするカリキュラムと、そのための国際コードを設けた。教職員の教育力、とくに英語力を高め、海外からの留学生はもちろん日本人学生の勉強意欲を引き上げる。新入生は全員が寮生活で、図書館は24時間開いている。

さらに「8月に卒業、9月に入学」といった世界の実情に合わせたグローバル水準の大学にしたことが大きかったと考える。これが、秋田という一地方で、最も先端的な高等教育を可能にしているといえるのかも知れない。

(なかじま みねお)